

米欧亜回覧

第61号

発行

特定非営利活動法人

米欧亜回覧の会

編集委員会

新年懇親例会は「中国」をテーマに・・・

一月二十日(木)日比谷聘珍樓

恒例の新年懇親例会は、一月二十日(木)六時から、日比谷の聘珍樓で行われる。これまで十数年、岩倉使節団の訪問国をテーマに続けたが、本年の一月のオランダで十二カ国を巡回し終えたので、新年は横浜への帰途、最後に寄港した中国(上海)をテーマに行うことになった。これは本会の名称「米欧回覧」に「亜」を追加したことに対応するものでもあり、これから当分は勃興する「亜」諸



10月全体例会 (国際文化会館)

国を順次フオロウしていこうという趣旨でもある。

従って、中国大使館から大使または公使もご出席の予定であり、これまで当会で講演していただいた諸氏、国分良成氏、上村達男氏、遠藤滋氏もお招きすることになっている。

会場は、富国生命ビルの二八階、夜景の素晴らしい聘珍樓であり、サプライズの趣向もあると聞く。どうぞふるって参加されたい。家族、知人、友人の同伴も歓迎します。

遠藤滋氏の講演、盛況!

「大中国とどう向きあうか」
第五十七回全体例会は、十月二十四日、国際文化会館講堂において、約六十名が参加して開催された。

第一部の会務報告に続き、第二部として遠藤滋氏の講演「大中国とどう向きあうか」が行われた。講演は、中国滞在十年以上にわたる「体験的中国論」であり、極めて刺激的で多くの

示唆に富む素晴らしい内容だった。参会者からも多くの質問や意見が出て、会場は熱気につつまれた。

(詳細は二頁)

上海万博を終えて

塚本弘氏のホットな体験談

(特別寄稿)

本会の理事でもある塚本弘氏は、十月三十一日に成功裡に閉幕した上海万博の日本政府代表として昨年の準備段階から携わり、本年四月からは現地博覧会場の運営委員会の議長として大活躍された。大任を果たされ、帰国したばかりの塚本氏に本紙への特別寄稿をお願いした。それはまさにグローバル・リーダーとしての貴重な体験であり、是非ご覧下さい。

(詳細は四頁)

読む会『実記』百巻読了・・・

新春一月から新しい船出、

IT教室も開催!

「実記を読む会」では、このたび全五編百巻を完読した。この五年間、見事な采配ぶりて会をリードされた桑名氏から、「雑感」を寄稿してもらった。なお、新年は、一月十三日より、「想も新たに新ラウンドの読む会」をスタートさせる。また、鶴飼氏らの肝煎りで、資料検索や情報発信に威力を発揮するノウハウ伝授の「IT教室」も開催されることになった。新会員はむしろ、興味のある方は是非参加してほしい・・・大歓迎です。

「クール・ジャパン」という言葉は、NHKのテレビでも取り上げられてすっかりお馴染みになった。日本のマンガやアニメなどのポップカルチャーが「かっこいい日本」とされたことがきっかけだった。これに関して朝日新聞(一月一日号)が、「かっこいい日本」と「かっこわるい日本」についてのアンケート結果を紹介している。そして「日本が世界に恥ずかしいワースト」のトップに、「政治・外交の貧困」と「自己主張の弱さ」を挙げている。

クール・ジャパンとタフ・ジャパン —恥ずかしい 政治・外交の貧困

泉 三郎

は初めて日本を対等の国と認めることになるのだ。それは司馬遼太郎の「坂の上の雲」にも描かれたように独立を確保するための必死の戦いでもあった。

思い起こせば、明治の政治家はタフだった。キリスト教問題での大隈重信、台湾征討問題での大久保利通、日清・日露戦争における伊藤博文、陸奥宗光、小村寿太郎など・・・それらは周到綿密な準備と決死の覚悟の上での「タフ・ネゴシエイト」だった。

それに比べ「クール・ジャパン」はいかにも軽い。マンガ好きの麻生太郎は平成日本の首相・外相を象徴しており、それに続く首相もまるで「クール」という

より「フル・ジャパン」の代名詞のようだ。久米邦武は米国の共和主義に「衆愚政治」の一面を見たが、現実の日本はまるでその危惧通りになってしまった観がある。平成日本は軽薄な世論に左右され、自己主張の論拠も無きに等しく、如何にしたらタフたりうるか、真剣に自問しなくてはならない時である。

第57回
全体例会

遠藤滋氏の講演、盛況！

大国中国とどう向き合おうか

—四十年のビジネス経験を通じて

第五十七回全体例会は十月二十四日(日)、国際文化会館講堂において開催された。出席者は約六十名。

十三時三十分より始められた第一部全体例会においては、まず泉理事長から昨今の隣国との緊張関係のコメントを含む挨拶があり、つづいて各部会幹事からの活動報告が行われた。実記を読む会(桑名)、歴史部会(小野)、英訳実記を読む会(永島)、グローバルジャパン研究会&事務局(石垣)。

小休憩の後、第二部の講演会が行われた。今回のテーマは「大国中国とどう向き合おうか」、三井物産の元専務取締役で、現在、香港最大のコングロマリットといわれるハチソンワンポア・ジャパンの代表取締役CEOである遠藤滋



講演する遠藤滋氏

氏に講演をいただいた。米国駐在十三年、中国駐在十年、その間中国とのビジネスは二十年以上にわたる遠藤氏ならではの「体験的中国論」は、刺激的で且つ多くの示唆に富むご講演であった。折からの尖閣列島をめぐる様々な背景もあり、多くの質問や意見が続出し活発な議論が行われた。

第二部終了後の、有志参加による第三部のワイン懇親会も多く参加者で盛りあがった。

(文責) 石垣禎信

講演までの経緯と報告

藤原宣夫

泉理事長はかねてから今後の日本は隣国である中国の事を知らなければ未来はないというご意見で、私に誰か適当な中国の専門家を紹介してくれとのご要望があり、迷わず、遠藤氏を推薦した。遠藤氏は現在香港ならずとも世界でも大変影響力のあるハチソンワンポア・ジャパンの代表を務めておられるが、三井物産時代には中国事務所代表

等、長年の中国滞在を経て、本社の専務取締役を歴任された経歴の持ち主として、中国ビジネスを日本人として開拓された一人でもあり、氏を我々の会に招いて講演頂いた事は大変有意義であったと先輩の一人として我田引水ならが考える次第である。

さて、中国は日本にとつて隣国であり、もつとも関心を持たなければならぬ超大国であるにも拘らず、我々日本人は中国の人達やその政治体制など理解が出来ない事が多い。そこで、私は最近読んだ本の中から遠藤滋氏の上梓した最近の著書「中国ビジネス成功への道—商社マンが明かす中華世界の真実—」を幹事会で推薦し、全体例会でお話しをして頂く事となった次第である。遠藤氏は私が奉職した会社の後輩でもあり、親しい友人として、早速遠藤氏に講演を依頼し、快く引き受けてくれたのが実情である。

ご講演の印象を一言でいえば、大変素晴らしいと言いたい。丁度日本と中国は九月に勃発した所謂「尖閣列島問題」で揺れている事にも触れられ、中国側の此の島に対する認識と日本のその認識は完全に違ったものであり、日本の政治家達はずっと、両国の歴史を勉強しなければならぬし、又、もつと、中国の

人々と政治家も含めて交流を密にする事こそ大切であると思われたい。彼の長年に亘る中国での実体験を基にした内容の非常に濃い話で、ユーモアも交えながら話された約九十分のご講演は参加者一同を魅了し、虜にしてしまったのではないかと思われる。

遠藤氏が中国とのビジネスを成功される鍵の一つとして、同じ漢字を使用している国民ながら我々は「同文同種」ではなく「同文異種」であると、茶の湯、漢詩、等を例にとつて強調されている。中国人は「報」、日本人は「誠」である、と言う事であるらしい。中国の人は「老朋友」になる為にはお互いに何度も会い食事を共にすると云う。日本のビジネスマンも中国人の人と付きあう為には誠実な人間関係を根気よく時間をかけて構築する事がとても大切である。

氏は中国の高名な李嘉誠と郭鶴年の二人の財界の巨頭との長きに渡る交流のエピソードを交えて具体的な人物として紹介されている。又、もつと、具体的な例としては孫文と満鉄総裁も務め国会議員としても有名だった山本条太郎との「大豆商談」を著書の中で取り上げている。山本は元物産の中国の代表でもあった

が、「欠点もあるが、中国の商人、実業家ほど約束を重んずる国民も少ない。一旦信用したら動かない。中国人に対しては親切と徳とを基礎とせねば大成出来ぬ。病人があれば薬を届ける：苗から植えて育ててあげる考えがないと成功しない」とも言っている。

過去の歴史には思い出しただくもない、忌まわしい関係もあつたにも関わらず、日本と中国は新しい世界観を持つてアジアの時代の中核たれと唱えておられる。その為には「慌てず、焦らず、諦めず、悔いず」に行動する事が大切と遠藤氏はこの著書の中でも唱えておられるのである。

氏は又、日本の回生、失地回復は日本の独自の優れた文化圏で可能との意見である。日本は世界での役割と存在感がまだまだ存在し、中程度の成長は可能とのご意見で、具体的に提案されている。即ち、日本に今一番必要な改革は、新しい体制作り(道州制、一院制、首相公選などの導入)であり、リーダーシップの育成、教育の刷新、安全保障力の強化や、企業が軸となつての経済成長で、日本の人口数の維持と、観光業や特定の移民政策等で就業者数の維持増強等を具体的に実行する事を提案されている。中国は日本にとつて、遠く



(PHP研究所)

て近い国である。歴史を紐どけば多くの文化が日本に伝わった、その恩恵を日本が受けなかったとは言わせない。それにも関わらず、遠い存在に思えるのは多分あの思まわしい戦争のせいであろう。しかし、時代は十九世紀から、二十世紀へと、そして、今は二十一世紀の時代に突入した。此の機に我々日本人も偏見のない眼で世界を見渡し、隣人の中国、又、韓国や他のアジアの隣人諸国と新しい関係を構築する事が大切で、そのために若い人々に大いに期待したいと言って締めくくられた。

最後に遠藤氏のご講演が大変評判が良く、私の所にも沢山の礼状や感想文を送って下さった方がおられたことは望外の喜びであり、遠藤氏も同じ感想をもっておられると思う。氏の新しいご著書をまだ、読んでおられない方にはぜひ御勧めの著書(左記)でもあり、特にこれからの日中関係、ビジネスに係る方達にはぜひ一読をお勧めする事で私の感想文、ご講演のご報告とさせて頂きたい。

「米欧回覧実記」 五編百巻完読雑感

桑名正行

今年二月の読む会で「回覧」の部を終え、「帰航日程」最初の第九十四巻「地中海の旅」の報告が終わったとき、年内に全百巻の完読間違いなし、との確信をえた。紅海、アラビア海、セイロン島、ベンガル湾、シナ海、香港及び上海と、十一月で完読達成となった。

百三十七年後の今日、この帰航シーレーン周辺の激変ぶりに驚かされる。イスラエル、中東産油諸国、イラク、イラン、パキスタン、インド、ベトナムそして中国と、これはもう地政学上、世界の「メイン・ストリート」と呼んでもおかしくない。かたや、「回覧」国を見れば、アメリカは順当にNO1になったが、翳りは著しい。イギリス(というより大英帝国)は見る影もない。フランスは、昔日の輝きはないが、パリは健在だ。ドイツはアップ・ダウンを繰り返すが、今やEUの中心的存在、ロシアも革命後、ソ連として一時アメリカと対峙したが、分解のあと復活の途上にある。久米の賞賛する「小国」群―ベルギー、オランダ、スイス、デンマーク、オーストリア等―は着実に

に座標を保持。大雑把に見て、こんなところだろう。ところで、わが日本は、どうだろう。アップ・ダウン・アップ・ダウン中(?)と、これまた激変国の最たるものといえそう。『帰航日程』七巻を通読してみても、歴史の有為転変を思い識らされた。さて、読む会といえは、故水澤周先生にふれなければならぬ。『実記』の現代語訳(五冊)が出版されたのが二〇〇五年五月。そして七月の「読む会」に、その「第二巻イギリス編」を持参し、扉に先生の署名(サイン)を頂いた。当時、読む会の場所は、「クラウン・インタールチェンジ」のラウンジであったが、当日は、先生ご持参のスコットランドの地図を、床面一杯に広げ、数人が地名探しに必死になってノゾキ込んでいた。「ハイランド観光の旅」の巻一の懐かしく思い出す。会の帰り道、「現代語訳が出来上がったのはよいが、読む会の進め方が悩ましくなりましたね」と先生がつぶやかされた。筆者も応答に戸惑ったが、「字句解釈に時間を取れないぶん、『実記』回覧国の歴史的背景、地政学的変遷など立体的に膨らませるなり工夫して、読み進める手もあるのでは」と、意味不明の応じ方をしたことを思い出す。

二〇〇六年十一月、設立十周年記念「国際シンポジウム」が持たれ盛会であった。たまたま、翌十二月、読む会の第百回目(に)当り、これまた盛大な記念パーティが行われた。読む会もこの時期には、国際文化会館の会議室に移っていた。

次に特記すべきは、二〇〇八年十一月、久米美術館に於いて、高田誠二先生のご出席を得て、研究集会(高田ゼミ)を開催させて頂いた。高田先生のご労作『久米邦武』(ミネルヴァ書房)を巡り、読む会の選抜三氏のレポートを中心に、色々ご指導を頂いた。その折、資料室を拝見、稿本の一刷から九刷までが『米欧回覧日記』とあり、十冊に至り『米欧回覧実記』となつている実物を目にし、感激ひとしおであった。読む会の会員ならではの「目の保養」を含め、楽しいひとときを体験させて頂いた。

読む会の毎月の報告者について敢えて触れさせてもらえば、「多彩・専門・博識」或る意味で異能(?)―虫眼鏡どころか顕微鏡派、双眼鏡から望遠鏡派まで。また、ITのプロも居れば、山林学の大博士も、都市工学の専門家も、そして『実記』のことなら何でもござれの御仁もいます。多士済々、月例会の報

告が楽しくも待たれるゆえである。『実記』中に見られる久米の叙景表現の好感度の強弱を測るため「恍惚度」という物差しを開発したなど、その一例である。

百巻を完読した、といつても「長編小説を読み切った」というのとは訳が違う。来る二〇一一年一月から、想を新たに「新ラウンド『実記百巻』」を読む会」をスタートさせる。会員各位のご支援をお願いすると共に、読む会への参加を期待いたします。

最後に、本稿では特に名前を出しませんが、「百巻完読」にご盡力頂いたレギュラーメンバーを左記し、その「功」に敬意を表するとともに、その「労」に深く感謝して、この雑感を締め括りたいと思います。

泉、小野、浅生、金本、小林(富)、橋本、三原、鶴飼、友田、芳野、永島、堀江、守屋(順不動)



10月14日・実記を読む会
(第百巻 香港及び上海の記)

特別寄稿

上海万博を終えて
—— 中国がより国際的な調和を図りつつ、
発展していく契機として ——

二〇一〇上海国際博覧会
陳列区域日本政府代表
陳列区域政府代表团及び運営
委員会議長

塚本弘

延べ百八十四日間、約七千三百万人超の人々が訪れた上海万博は、盛況のまま十月三十一日をもって無事、閉幕しました。これは、大阪万博の六千四百万人の入場者記録を大幅に更新する文字どおり史上最大の万博となりました。しかも期間中を通じて安全に運営され、かつ来場された皆様に楽しんで頂いた万博として終わり、いまは心地よい疲労感と安堵の気持ち、それに充実感でいっぱいです。

しく見ていただけたのが最大の要因で、約五百四十万人が日本館に來られました。米欧回覧会の皆さんも六月二二日に訪れられ、日本館、中国館、ドイツ館をご案内したのも楽しい思い出です。

万博というものはある意味「知のオリンピック」だと思えます。世界中から参加した多くの国・地域が、独自の工夫を凝らし、しかも楽しめるような、あるいは参加できるような展示を表現しています。何よりオリンピック的なのは、十月三十日開催のBIE(博覧会国際事務局)デーのとき、の三つの分野(テーマ、建築のデザイン、創造的展示)で、それぞれ金・銀・銅の表彰式を行いました。日本はこの「創造的展示」部門で銀賞を授与されました。

ところで、こうした万博の「知のオリンピック」としての重要性を、一八七三年にウィーンの世界博を訪れた岩倉使節団は十分認識しています。第八二巻、第八三巻と実に詳細に各国の展示について紹介し、「国民自主ノ生理ニ於テハ、大モ畏ルニ足ラズ、

小モ侮ルベカラズ」とし、「此等ノ競ヒハ、是太平ノ戦争ニシテ、開明ノ世ニ、最モ要務ノ事ナレハ、深ク注意スベキモノナリ」としているのは、さすがです。

個人的には、二〇〇九年秋、満場一致で運営委員会議長に選出されて、それ以来、閉幕に至るまで、率直に申し上げますと、大変苦勞をいたしました。合計三十二か国がステアリング委員会、すなわち主催国と参加国が、円滑に万博の運営を行うための会合に参加したのですが、万博の本部がフランス・パリに置かれていたこともあり、ほとんど欧州から議長が選出されてきました。議長に日本人が選出されたのは万博の歴史ではじめてのことです。特に、就任後の数か月間は、ステアリング委員会の中でたいへん激しい議論が交わされるなど、正直言ってなかなか勞の多いものでした。しかし、こうした白熱した議論は今回が特別ということではなく、フランスが議長に選出された先の愛知万博でも同様でした。そうしたやり取りを経て、最終的に収束し、うまくマネジメントされていくのが通常のパターンなのです。

結果的に中国の関係者、スタッフの人たちはみな、たいへん良くやってくれたと感謝しています。たとえば上海市の最高責任者である俞正声共産党書記は、二つの重要な指摘をしておられます。まず、「オリンピックと万博は、全く違う」ということです。すなわち、オリンピックは開催期間が三週間ほどだが万博は半年間に及び、多くの観客が会場内を縦横に移動する。したがって観客のコントロールの難しさはオリンピックの比ではない、加えて万博は、参加国が出席費用を供出してパビリオンを建設し、その運営を行うので、主催国と参加国の関係は常に円滑であることが求められる。こうした違いを明確に認識しておく必要がある、という指摘です。それゆえ事務局は常に、参加国との関係を良好に保つこと、観客のコントロールを重視することに置いて活動していました。

俞書記のもう一つの考え方は、「開催都市である上海市は、完全無欠な上海市としてこれを迎えるべきではない」という内容のものでした。完全無欠な上海市などはそもそも不可能だし、それは真実の姿ではない、たとえ欠陥が見られても、それは今後改善すべき点として順次改めていくという精神が重要なのだ、と。まさしくその通りであって、その発想があったからこそ、万博運営は成功したのだと、私は確信しています。

最後の方にステアリング委員会の際に、万博全体の責任者を務めた中国の華君鐸政府代表と、今回の万博の運営に当たって、何が一番大事だったかという話になり、華氏はこう書きました。「兼听則明」(聞けば即ち全てのことが見明らかになる)と。そこで私も、その言葉の横に「率直対話」と書きました。正に、この精神を両者の共通認識として、この半年間を乗り切ってきたと思います。よく人の意見を聞き、腹を割って話し合うという、コミュニケーションの基本がやはり大切なのだと、今なお実感しています。

中国が国際的なイベントをマネージしていくノウハウを習得したという点で、この上海万博の成功は大きな意義があったと思います。今回の成功は、今後の自信となるでしょう。そして自信を持つということは、余裕を身につけることでもあり、今後利害の相違や意見の不一致に直面したときにも、他の国々の考えや意見も受容していくことにもつながります。今回の万博成功が中国にとって「より国際的な調和を図りつつ、発展していく」契機になってほしいと期待しています。



歴史部会 (10月15日・国際文化会館)

歴史部会報告

担当幹事 小野 博正



mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp

■松野 碩と松野クララー近代林学と幼稚園教育事始(講師小林富士雄氏)

九月二十七日開催、出席者十三名。

松野 碩(はざま)は日本近代林学の創始者である。

幕末の風雲のなか、長州の郷里からなつかば脱藩上京し、ドイツ語を学んだ縁で、北白川宮の随行者となりドイツ留学という機会を掴み、エーベルスワルデ森林アカデミーで日本人として初めて林学を学ぶ。彼を励ましたのが、使節団で回覧中の大久保と木戸であった。帰国後、大久保は山林行政の建議書を提出。彼の政策的後押しを得ながら、碩

は、自らの役割を林業技術者養成のための山林学校作りと定め、紆余曲折の末これを果たす。東京山林学校は、駒場農学校と合併して、東京農林学校となり、後に、東京帝国大学農科大学となる。

クララは留学生の碩とドイツで婚約し、多くの障害を乗り越え、日本で結婚する。その二人の国際結婚の実現に、全面的に協力したのが青木周蔵、品川彌二郎と木戸孝允であった。木戸日記には、これが、公然たる国際結婚第一号と言っている。

クララは、明治八年開校の東京女子師範学校の英語教師として働いたあと、翌年九鬼隆一により開園された同校付属幼稚園の主任保育母として招かれ、本邦初の幼稚園教育の確立に貢献する。欧米に広まりつつあった幼稚園教育は、保育唱歌、唱歌遊戯が重視され、開園式でもクララのピアノ演奏ときの唱歌が披露された。ピアノの園児教育採用も草分けである。幼稚園では、クララは身体を動かす運動や野外保育を重んじ、園児に野菜栽培をさせたりした。

とかく歴史といえ、坂の上の輝かしい雲を見つめて、坂を上って行く人々が中心になるが、政治家や思想家でない、地味な実業の分野で活躍した数々の、埋もれた先人た

ちの先駆的足跡を辿ることの大切さを教えていただいた、貴重な講演であった。

(文責) 小野 博正
■青年・渋沢栄一の欧州体験とその前後(講師泉三郎氏)

十月十五日開催、出席者十八名。

「日本的資本主義の父」ともいわれる巨人渋沢栄一の青年時代に焦点を絞った報告。とくに若い時代の欧州体験の影響とその前後の活動に話の重点が置かれた。

まず、将軍徳川慶喜が、パリ万博への昭武使節の随員に何故渋沢栄一を選んだかという点が興味を惹く。そこでは、豪農・藍商家に生まれ育った栄一が十七歳の時に代官から受けた屈辱がバネになって尊皇攘夷の過激派壮士になることや、それが挫折して京都へ亡命し一橋家に仕官する時の話、そして倒幕を唱えながらその相手の將軍の臣下となってしまう運命の不思議さに言及...

それから、欧州旅行とパリ滞在、そこでナポレオン三世の治世と万国博覧会を見たことが青年栄一に大きな影響を与える。若い時代の異文化体験の大事さが印象的だ。それから幕府瓦解で留学継続か中止かの窮状に陥るが、栄一の対応ぶりは見所である。いよいよ帰国、横浜では

「喪家の狗の如し」で国事犯扱い、にもかかわらず静岡藩にいつての仕事ぶりが見事。どんな環境にあっても最大限の努力をして活路を見出し解決していくところが栄一の魅力である。そのあと明治新政府にスカウトされて大蔵省の仕事をする。岩倉使節団の留守中大隈重信、井上馨と共に欧州体験を活かして大活躍をする。

思えば、渋沢栄一はもともと「商人的農民」だが、その上に「一橋家仕官」時代の実務体験があり、さらにその上に欧州体験が重なる。それがその後の巨人渋沢を生む根幹になっているのではないかと

いうのが本論の主張である。また、論語の人でありながら、詩作の人・ロマンの人でもあり、多くの女性を愛した大の艶福家であったことにも触れて、次回の「壮年時代の渋沢栄一」の小野博正さんへバトン渡す形となった。

(文責) 泉三郎
■渋沢栄一・壮年時代(講師小野博正氏)

十一月十五日開催、出席者十九名。

九十一歳まで生き、五百の企業と、六百の福祉事業・学校などの創設に関与して「日本の近代資本主義の父」とも呼ばれた巨人栄一の業績に迫る。それは、彼の活躍を用意

した開国から明治維新という時代の、西洋の民主主義、資本主義思想の受け入れの揺籃期という時代性と、「後進の夢を実現する触媒の器」(寺島実郎)という栄一の資質とも無関係ではない。同時に、環境的幸運をすべて生かして、官を捨てて実業界に身を転じるや、第一国立銀行を手始めに、王子製紙、大日本精糖、日本郵船や日本煉瓦などの創業、田園都市、東京女学館、日本女子大学、一橋大学など現在まで営々と存続する数多の創設に関わる過程を検証した。

喜寿の時期に、『論語と算盤』を残したのは、後継の経営者たちに、公益を忘れた資本主義は、金銭万能の強欲資本主義に陥ることへの警告であった。そこに、渋沢栄一評価の現在の意義があろう。

《義利合一》 《士魂商才》 《道德経済合一》などの栄一の遺訓は、すべて同じ意味であり、「利」を極力抑えて、「義」||公益、他益が企業経営の根底になければならないと戒めた。

栄一の、弱点のひとつでもあった女性関係についても、鹿鳴館時代に活躍した英傑たちの美しい妻たちの写真と共に、この時代の風俗的背景を紹介した。
(文責) 小野 博正



1870年代の上海
 («写真・絵図で甦る 堂々たる日本人»)

実記を読む会報告

担当幹事 桑名 正行

Tel&Fax 03-3642-9570

mkuwana@nifty.com



■ 第四百十三回

九月九日開催、出席者十一名。第九十九巻支那航海航程ノ記。

いよいよ使節団の回覧も終わりに近づき、諸々の感慨を胸に、既に西欧の侵略を許したアジアの国々に寄港しながら航海を続ける。

八月十八日、マラッカ海峡を通過後、英国統治下のシンガポール着。コレラ流行中に上陸せず。八月二十二日、仏統治下のサイゴンに到着。漢字に至る所に使われていて人情が解り(「是象形文字ノ利ナリト謂ヘシ」)、懐かしうんざりし、欧米人の「日本人は清潔」と言う意味がやつと解る。一方仏人居住区には白亜の西欧風建物が並び、一

行はホテルにて夕餐。

久米の安南国の解説は水沢氏の指摘のように仏領インドシナの事を指していると思われるが、地名も年代により意味する範囲がまちまちで、当時の限られた資料での苦労が偲ばれる。

減多に言及されなかった食物の感想「『マンダスタン』ハ、果中ノ最上品タリ：甜ニシテ微酸ヲ帯ヒ、甚タ腴ニシテ、ロニイレハ氷解ス」とか、女性の容姿に対する記述「婦人ノ丰姿甚タ姣美ナリ、眼睛浄ク、鬢髪黒ク且直シ」等は、主な役目を果たした安堵感とアジア人としての親近感のなせる業か?

(文責) 浅生 庸子

■ 第四百十四回

十月十四日開催。第百巻 香港及び上海の記。

第百巻は、香港より上海を経て帰国するまでの日誌である。とくに、香港や上海の記録は当時のこれらの都市の状況を良く伝えている。また、日本に帰国してからの船旅の記録はほとんど記載がなく、気持ち「帰心矢の如し」であったことは察せられる。

世界地図を見ていて気がついたことは、地中海と日本海・東シナ海との面積がかなり近いことである。また、北海道稚内より鹿児島港までの距離が、鹿児島港より

香港までの距離に等しく、また地中海でエジプト・カイロよりナポリ(あるいはアフリカのチュニス)、ナポリよりポルトガル・リスボンまでの距離に相当する。この地理的距離に相当する。この地理的距離に相当する。この地理的距離に相当する。

古代ローマ時代は船で地中海を交易していたが、わが日本海・東シナ海においても多くの船の交易があり古代東シナ海世界を形成していたことが推定される。今回は、古代の東シナ海・日本海における人間の交流という観点から、魏志倭人伝に登場する邪馬台国の所在地の推定を加えた。久米邦武が邪馬台国の九州説をとっていたことは今回初めて知った。

(文責) 友田 燁夫

■ 第四百十五回

十一月十一日開催、出席者十一名。第九十八巻ベンガル湾航程ノ記。

一八七三年八月十二日、早朝、蛇や龍のうねるようなセイロン島の濃緑の山脈を遠望しながらベンガル湾を一路シンガポールへ。(このルート

は、鷗外、漱石、蘆花、藤村、荷風ら文士たちも航行した)八月十三日(…洋中ミル所ナシ)。蘆花はセイロン島に着く直前、洋上で「龍巻(Water Spout)が立ち昇って

消え行くのを望見している。鷗外の『航西日記』は全文漢語で記されているが、ベンガル湾、アラビア海、紅海沿岸などの描写に、久米『実記』の中の漢語が数多くソノママ登場してくる。察するに、陸軍省ドイツ留学生として赴任当時(明治十七年)、二十二歳の鷗外は、既に刊行されていた『実記(全巻)』を参考書(?)として携行していたに違いない。

久米は「今日日本ノ民、方ニ外航ノ緒ヲ、西洋人ヨリ誘啓セラレ、争つて欧州に行くが、その視野からはインドや南洋は脱落してしまっている。：今後、西洋視察を指す人々の中から、シンガポール、カルカッタ、ボンベイなどに赴く人がどんどん増え、この『実記』のような立場で地理や物産を記録するようなものが数多く現れてくる事を期待して、カルカッタ、ボンベイ両都市の概要を述べ、そうした記録を早く作る人の出現を待ちたい」と忠告と期待の檄をとばしている。

八月十五日(…此日午後ヨリ、蘇莫荅刺ノ海浜ニ入テ、満刺加湾ヲ駛ル)。スマトラ島西北端アチェ首長国とオランダとの「アチェ戦争」が一八七三年三月に勃発、アチェ・スルタン軍との交戦で戦死したオランダの将軍ケ-

レルの後任総司令官ファン・ウィーテン將軍の一行と、偶然この「アヴァ号」に乗り合わせるという、使節団にとり歴史的「現場立会い」のヒトコマがあり、『実記』の記述は、現在進行中であつた植民地制圧劇の生々しいドキュメントナリとなっている。

(文責) 桑名 正行

■ 第八十六回

十月二十一日、出席者七名。

Chapter 63

英訳実記を読む会報告

担当幹事 岩崎洋三

Tel & Fax 03-3488-0532

y-iwasaki@isr.or.jp



版の注は三十七

項目三頁半におよぶ。久米は、前年日本を訪問した皇太子の名前や四月六日に謁見した相手の名前などを間違えており、英訳者は木戸日記をたびたび引き合いに出して丁寧には、訂正している。坂内知子氏の中で久米の不注意の多さを指摘し、使節団が旅程上の最遠くに達し、久米が「精神的肉体的に疲労感が出てきた頃だ」と同情的に記している。今回討議した英訳に関する

疑問点七か所のうち三か所を下記する。

・「一周日ニ三度ハ、正式に回向ノ儀ヲ行フ」 one day a week three formal memorial services are held.

・「叔姑ノ墓ニハ、草芥ヲ供ス、」 on the graves of uncles and aunts there are flowers.

・「白金ノ価、尤モ高低アルナシ、」 The value of platinum is most liable to fluctuation.

(文責) 三原 浩

■第八十七回

十一月十八日、出席者は六名。

本章はベルリンよりサンクトペトルベルグに入ってから一週間目、雪の舞い散る中、外務省を訪問しての外交交渉と紙幣印刷局、図書館の見学で始まる三日間の滞在観察記である。

紙幣局では始めに製紙工程及びロシアの優れた透かしの技術についての詳述があり紙幣の印刷技術、機械の精密さを絶賛している。また、ロシアの財政、通貨改革の変遷についても解説し、遂には新しい型式の国家紙幣で「クレジツトヌイエ・ビレトウイ」と称する「国家信用券」が発行されるに至ったとしている。

近郊のコルピノ村に移動してギリシャ正教会と海軍工

廠を訪問。教会の精巧な建築、美しい内装を説明し「霊験甚だ著しく」遠近の村から多くの信者が祈願を掛けに集まり、その「倭神ノ状ハ、酷々本邦俘屠ノ寺ニ似タリ」となっているが、「倭神ノ状」の英訳はplease their god、現代語訳ではへつらうの意味の「信仰の対象におもねる」となっているが「神に仕える」serve their godという程度の意味か。

主に軍艦の鋼材を製造しているコルピノ製鉄所に行く。

ここでは次のようなロシアでの製鉄所立地の悪条件を挙げている。①厳寒で不安定な気候は高炉の「火勢ヲ減スル」

② 巨大な建屋を支えることができる安定して強固な地盤の欠如③ 製鉄原料搬入の水運の便悪し④ 豊富な水利と水力の不足。併し当時サンクトペトルベルグ地区の四、五カ所

にあった製鉄所は之等悪条件にも拘わらず努力して操業を行っていたと論評。

四月九日、使節団は育嬰院と聾啞院を見学したが、坂内知子氏の論文によると、「当地で観察した内容は文化的にも日本の現実とは余りにも懸け離れており、又日本の『富国強兵』という国策下では孤児救済対策は鈍いものであった。」と記されている。

(文責)

岡部 國雄

グローバルジャパン研究会報告

担当幹事 石垣 禎信



pms-tokyo@m4.dion.ne.jp

■第三回「二十一世紀に活かすー文明としての江戸システム」

十一月二十一日開催、参加者は二十七名。上智大学経済学部教授の鬼頭宏氏を招き、経済史の視点のテーマで行われた。

鬼頭氏は昨年

文化勲章を授与された速水融氏の直弟子であり、「人口歴史学」という分野が人間一人の人生を紐解く、いかに地道な細かな作業の積み重ねから成っているか、また当時フランスの教会資料を基に行われていた手法を日本に導入し、宗門改め帳を基に調査を行った上で人口の推移から歴史を見る、ユニークな学問であることを説明された。この学問方法を文明史の範囲に広げ、文明の移り変わりや人口推移、経済動向がどのような関係にあるかを分析された。

江戸時代には生活に必要なエネルギーと原材料を土地の生産物に依存する循環型生活様式を中心とした文明システムが形成されていた。文化面では芳賀徹氏が「ゆっくりと営まれ成熟しやがて崩れていった一つの完成した独特の文明体」と評するように、第

一次産業の市場経済化が進み、庶民の読み書き能力も高まり、余暇を楽しむライフスタイルが生まれた。また、渡辺京二氏が「十八世紀初頭に確立し、十九世紀を通じて存続した古い日本の生活様式」であると主張するように、一つの完全なる文明社会が存在していた時代といえる。

しかし、こうした文明の発展、成熟の背後で、気候寒冷化が凶作を引き起こし、飢饉を頻発させたことと、晩婚化が進み出生も抑制されて、人口が減少していたことを指摘する。その結果、土地と人口の均衡がもたらされ、長期的には生活水準を高めることにつながった。現代も同様に、人々の知的好奇心の高まりによって経済が発展し、人口減少が起これるといふ、いわば文明が成熟した結果ということができる。十八世紀に文明としての江戸システムは成熟期に達すると同時に、次の時代を用意する始動が始まったように、現代も次の社会への移行期である。現代に相応しい、生活文化の伝統を形成しなければならぬ局面を我々は迎えている。一つの時代の終わりとはい、次の文明システムを生み出す要素が息づき、始動する時代であったことを学ぶべきであると指摘した。

(文責)

小松 優香

関西支部報告

担当幹事 難波 康熙



namba@jttk.zaq.ne.jp

■第五十二回
十月十六日開催、出席者九名。

輪読は第二編(巻)の第二十四卷(章) 倫敦府ノ記中八十三頁十行目から。読み上げは脳の活性化に資すること、輪読を今回から持ち回り制で行うことになった。

上院、下院の二院制度は英国から始まり、近代国家の議会制度の先鞭をつけたが、上院が王族、貴族および高位の聖職者からなっており、貴族が世襲の立法権を持っているのは貴族支配(アリストクラシー)の名残りなのではないかと久米は言っている。

〔訃報〕

関西支部を立上げられ、初代の世話役を務められた山崎岳麿氏が十一月二日に八十七歳で逝去され、四日に告別式が執り行われた。米欧亜回覧の会の他、ボランティア活動や自治会の地域活動など幅広く活動されていて人の繋がりがも広がったためか、故人を偲んでの会葬参加者は予想を超える多さであった。ご冥福をお祈りいたします。

(文責)

難波 康熙

特定非営利活動法人
「米欧亜回覧の会」ご案内

- 趣旨** この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。
- 会員** 趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。
- 例会** 年に4回、全体例会があります。
- 部会** テーマ別に読む会、歴史、現未来部会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。
- 機関紙** 年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。
- 役員** 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。
- 会費** 年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、学生、仮入会希望者には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。
- 事務局** 「米欧亜回覧の会」
〒135-0021
東京都江東区白河 4-9-14-1407
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:080-6612-1101 FAX:043-238-6690
- 入会申込**
入会申込書は事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。
なお年会費などのお支払は郵便振込が便利です。
00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ等
また、書籍・DVD案内もあります

<http://www.iwakura-mission.jp>

*お知らせ欄も時々チェックしてください



<催し案内>

2011年1月～3月の予定です

☆新年懇親例会

日時: 1月20日(木) 17:30開場 18:00開宴
テーマ: 中国
場所: 日比谷 聘珍樓 (03-3508-0555)
千代田区内幸町2-2-2 富国生命ビル28階
会費: 8,000円
(家族、同伴者6,000円、学生4,000円)

☆実記を読む会

日時: 1月13日(木) 14:30～17:00
2月10日(木) 14:30～17:00
場所: 国際文化会館Cルーム
会費: 1,000円

★定例IT勉強会スタート★

趣旨: 『実記』研究に役立つパソコンの使い方
対象: パソコンを使いこなしたい人
日時: 1月13日(木) 13:00～14:30
2月10日(木) 13:00～14:30
場所: 国際文化会館Cルーム
会費: 800円 ※問い合わせは事務局まで

☆英訳実記を読む会

日時: 1月20日(木) 18:30～21:00
2月17日(木) 18:30～21:00
3月17日(木) 18:30～21:00
場所: 国際文化会館 402室
会費: 1,000円

☆グローバルジャパン研究会

日時: 3月4日(金) 18:00～21:00
テーマ: 科学技術は日本を救う
講師: 北澤宏一氏
(独立行政法人 科学技術振興機構理事長)
場所: 国際文化会館 403、404室
会費: 1,000円

☆関西支部例会

日時: 1月15日(土) 13:00～16:30
3月19日(土) 13:00～16:30
場所: 大阪弥生会館

編集後記

◇今年のニュースは、使節団訪問国十二カ国のテーマが一巡する一月の新年懇親例会で始まりました。そして今号の、実記を読む会が第四百十五回(十一月)でついに『実記』五編百巻完読、で締めくくることがになります。当会にとって二〇一〇年は大きな節目となりました。

◇長い年月を要する目標を自らかかげ、着実に歩を進めて本当に達成してしまう、多くの会員の向上意欲と行動力の結集は賞賛に値します。しかしながら、長年、当会の活動や事業に尽力されてきた会員の中には、大きな充実感とともに若干の疲労感を感じている方も少なくないように思います。次の目標が定まるまで「しばし充電」もよいかもしれません。

◇二〇一一年の新年懇親例会のテーマは中国と決まりました。「亜」にも関心を向けるグローバルジャパン研究会や細目多岐にわたる歴史資料・情報検索などの実践技術を考えるIT研究会などの新時代に向けた活動ももちろん、実記を読む会も『実記百巻』の新ラウンドとなるなど、会員参加の次の道標はいくつか示されています。新しく入会された方も、是非、挑戦してください。(N)